
Gunner Game

涼風 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G u n n e r G a m e

【Nコード】

N1714S

【作者名】

涼風 蒼

【あらすじ】

高校教師である森本誠人は、モリモトタカト熱血・純情派な新米教師である。教員生活に慣れ始めた頃、一人の教師が赴任してきた。しかし、彼は森本とは全く正反対な存在だった。仕事上では何の問題もなく日常が過ぎていくのだが、とある日を境に森本の日常は大きく反転してしまう。東藤の鞆から見つけてしまった非日常的な物。そして、いきなり始まってしまうガンナーゲーム。戦いの末、勝利を手にするのは森本か。それとも東藤か――……

prologue (前書き)

まず、この物語の元の設定は、私の友人から頂いたネタを小説にしています。もちろん、彼女からの許可はとってあります。まだまだ全部書けていませので、更新速度は遅めになると思います。まだまだ未定な部分がありますので、あまりに酷い残酷描写などを入れる際には、キーワードなどで追加しておきます。

prologue

ソイツとの出会いは、偶然だと思っていた。

日本人離れしている端整な顔立ち。漆黒の髪は男であっても見惚れてしまうほど綺麗で、どこかのアニメや漫画にでも出てきそうだ。妖しげな雰囲気ですら、彼の魅力の一つに過ぎなかった。

「はじめまして。赴任してきた東藤隆斗です。今日から副担任となりました。よろしく願います」

好印象で、礼儀正しい。ソイツの第一印象はそんなものだった。だから、まさかそんな奴と最悪なゲームが始まるなんて、その時の俺は思ってもみなかった。

Opening Game

忙しい一日が目覚まし時計のベルから始まった。ピピッと煩く鳴り響くそれに、右ストレートをかまして止める。俺の朝は、いつもそんなものだ。

「今日も気持良く入った……何か良い日になりそうだな♪」

身支度を数十分で済ませると、朝食にありついた。アパートで一人暮らしをしている俺は、彼女いない歴二十四年。自分の年になる悲しさは二の次で、今は生活に必死こいている新米教師だ。

「お、焼けた」

トースターに入れたパンが二枚とも焼けたらしい。出てきたトーストを皿に置き、フライパンで焼いていた卵をその上へと乗せる。冷蔵庫から数種類の野菜を取り出して刻み、小皿に盛ればミニサラダの出来上がりだ。

「いただきます」

きちんと手を合わせて、パンを一口齧る。若干甘い珈琲を飲み、時計に目を向けた。

――7時25分。

そこから三十分近くかかって学校へと向かうのだ。HRは八時三十分から。余裕で間に合う時間である。

「ごちそうさまでした」

我ながら小さい頃のくせではあるが、最近は故意的にしている礼儀。憧れの教師となった喜びからか、苦勞は感じても苦痛とは思わない。

「いってきまーす」

子どもの頃は恥ずかしさから、あまり好きではなかったが、今は一教師。例え、新米でも生活の一つ一つには気をつけないと。

家の戸締りを確認し、車へと乗った。車で三十分程の道のりは近いとは言いがたいけれど、結構真っ直ぐな道のりをしている。校門を通り、指定された場所に車を止めた。

まだ学生が来るには早い時刻だが、校門からは数人の学生が登校してきている。ここに配属されてから数日。まだまだ新米な俺は、色々忙しい日々を追われているが、それなりに充実した教師生活を送っている。

「おはようございます、森本先生」

「おはようございます、東藤先生」

自分の座席へと座ると、隣席の同僚が挨拶をしてくれた。それに笑顔で返し、今日の用意を机の上へと取り出す。

隣の同僚は、俺とともに同じクラスへと割り当てられた人物だった。しかし、共に新米のはずだが、物静かな性格と端正な顔立ちのせいか。同じ新米とは思えないほど器量がよく、助けられてばかりいる。同い年であり、同じく新米教師。しかし、俺とは正反対な存在だった。

「ん？」

そんな隣人の席にある黒い物体が視界に映った。目を向けてみると、それはいつも東藤が持ってきている黒い鞆だった。普通のサイズより大きく、がっしりとした素材の鞆は、教師の姿とは少し場違いな物のように思えた。サラリーマンなら、特に気にするような鞆ではないのだろうか。

「そういえば、東藤先生。いつも持ってきているその鞆、何が入っているんですか？」

ちよっとした疑問だった。ほんの少し、胸の奥で疼いた好奇心。

「これですか？ これは……」

「これは？」

思わせぶりの口調に、思わず身を乗り出して東藤を見る。

「秘密です、森本先生」

しかし、そう簡単に教えてくれるはずもなく、この副担任はニッ

コリと笑ってぱつぱつと切り捨てた。それ以上の追求をさせないほど、すっぱりと。

けれど、往生際悪く追求しようと口を開く俺に、東藤はスッと時計を指した。

「あ、早く行かないとH Rが始まりますよ」

そう言われ、反射的に時計へと目を向けてしまった。話を逸らされてしまったが、彼が言ったことは本当だった。時計はH R開始五分前を差している。その時刻に慌て、俺は机上にばら撒いた資料をまとめて教員室を出て行った。その後ろを、なおもにこやかな表情で東藤も付いてくる。

幸いなことに、教室は教員室からさほど遠くなく、同じ階にあった。鐘が鳴り響く中、教室へと慌てて入れば、生徒たちから爆笑された。歳が近いせいか、教師という感覚を時折忘れてしまいくさになる。けれど、俺の後ろから現れた東藤を見るなり、生徒の声は静まり返った。これほどまでにある貫禄の差は何なのだろうか。

「さ、森本先生。ホームルームを始めましょう」

爽やかに微笑んで言う東藤の言葉を聞いて、ハッと我に返った。そうして、わざとらしい咳払いをしてから最初のお役目であるH Rを始めた。それからあつという間に時は過ぎていった。目くるめくように時間は過ぎ、気付けば放課後となっている場合が多い。けれど、新米教師としては中々順調に日々を送っていると思う。もちろん、忙しさは半端無いけれど。それでも、憧れていた教師へとなった今、泣き言なんて言ってられない。

「……あと、これとこの資料を準備して……この書類を書けば、今日は帰れるな」

ぶつぶつと言葉を吐きながら、机上に紙の山が出来ていく。その量の多さのため息をつきたくなる。

「あと少しです。頑張りましょう、森本先生」

隣にいる副担任に励まされてしまった。その姿を見ると、自分の力のなさを嘆きたくなる。しかし、そればかりに気を逸らしている

暇はない。

両頬を叩いて気合を入れなおし、俺は作業へと取り掛かった。けれど、時は残酷にも過ぎていき、フツと集中が切れた。チラッと時計を見ると午後十時を差している。

「げっ……もうそんな時間かよ！ すみません、東藤先生……て、あれ？」

隣で作業していると思っていた副担任へと目を向けると、そこには誰もいなかった。彼の席を見回して見ると荷物はまだある、ということは帰ってしまったわけでもなさそうだ。

「東藤先生？」

室内を見回すが、誰一人いない。他の教員たちはすでに帰路へとついたのである。窓から見える外は暗く、誰もいない教員室。たった一人ということから、気味悪さが体を突き抜ける。ブルツと震える体を片手で抱きしめながら、俺は彼を捜そうを席を立った。

「？」

けれど、ふと隣にある彼の大きな鞆が俺の足を止めた。彼がいつも持ってくる大きな黒い鞆。今朝にも何が入っているのか聞いてみたが、結局何も教えてくれなかった。

それほどまでに大切な物が入ってくるのだろうか。

好奇心がウズウズと心の奥底から溢れてくる。理性では制止する声が聞えているのだが、好奇心のほうに勝ってしまったようだ。

「す、少しだけなら——……」

恐る恐る手をやって鞆を開けた。けれど、そこに入っているのは大切な物などではなく、まして必需品とはかけ離れた代物だった。

「え？」

そこにあるのはほぼ黒一色に埋め尽くされた様々な銃の数々。小さなものから中くらいの大きさのものが丁寧にも、それぞれの型に当てはまった場所に点在している。それは、まるでどこかの洋画のような光景。教職であるはずの彼が、手にする事などありはしないはずの物。

「……」

言葉が出なかった。嘘だと思ったかった。けれど、一つだけ持ち上げてみれば、その重さが現実であることを突きつけてくる。

「ほ、んもの？」

ようやく搾り出せ声。その声は震え、喉がごとりと鳴る。取り上げた一つを握りしめると、俺は東藤を捜しに教員室から走り出した。

「東藤！」

人影を見つけ、俺は彼の名を叫んだ。東藤はゆっくりと振り向き、俺を見つめてくる。その瞳はどこか冷たさを感じさせた。

「おや、どうしました？ 森本先生」

爽やかに微笑むその表情が、今では偽りの仮面のように見えた。けれど、そんなことに怯えるわけにもいかず、俺は東藤へと詰め寄り持ってきた物を突きつける。

「これは何だよ？ こんなもの、俺たち教師には必要はないだろ」

「……」

「何なんだよ、あんた。何で……何で拳銃なんて持ってるんだよ！」

そう、俺が東藤の鞆から見つけた、本来なら一般でも持つようなことのない物。

拳銃。

どんな型とか、どんな種類かなんて知るわけない。けれど、持った感触や重さは、レプリカと思うにはあまりにも現実味がなく、むしろ本物だと言われれば納得してしまえるほど。

だからこそ、これ突きつければ多少の動揺が出るはずだと思っていた。けれど、東藤は呆れたような表情をするだけで、特に動揺している風には見えなかった。

「アンタ、俺の鞆を勝手に開けたのか」

「そ、それは……」

「ま、いいけどな。別に、アンタ一人に見られて困るような物でもないし」

「なっ！」

東藤の台詞に、頭に血が昇ってくる。日本という国で、まさか本物の拳銃を見るとは思わなかった。平和な国、それが日本。もちろん、警察などが持つことはあるが、市民であるはずの俺たちが持てる物ではない。

「警察、て柄でもなさそうだしな。あんた、一体何者なんだよ？」

「……何者、か。俺は依頼を受けてこの生徒を殺しに来た。そのために教師になりすましているだけの、単なる暗殺者、だよ」

「は？」

あっさりと俺の問いに答えたことと、彼の口から出た言葉に、俺は間抜けな声が出た。こうもあっさり答えられると、本当のことを言っているのか判断できない。そもそも、暗殺者など聞いたことがない。そんなものが存在するのはどこかの外国だけだと思っていたけれど、目の前にいる東藤は余裕の笑みをこぼし、俺の反応を楽しんでいるような顔をしている。嘘でも警察だと言ったほうがまだマシだ。

「な、何だよ、暗殺者って……そんなもの……」

「この日本にいるはずがない。いや、居るんだよ。現に今、アンタの前にいるだろ」

「だ、だったら余計に！　なんでそう簡単に自分の正体をバラすんだよ！？」　おかしいだろ！？」

「おかしい、ね。問われたから答えただけ。それ以上に何かあるのか？」

「いや、だって……」

あまりにも平然とする東藤の態度に、俺は困惑するしかなかった。答えた全てを受け入れるなら、東藤はある生徒を殺す依頼を受けて教師の振りをしてまで来た暗殺者。けれど、それをあっさりと答えるのはどう考えても不自然だった。

「理由が欲しいのか？　何でこうもあっさりと答えるのか、の」
「……」

「何の支障もないからだよ、アンタに喋ったところで」

「な、に？」

「そうだろ？ アンタは一教師。日本という国は防衛手段でも市民は銃器を持つことが許されていない、そんな平和ボケした国だ。おまけに、アンタがさっきの反応をしたように、この国に暗殺者の類が存在することなど真に受けない。警察だってそれは一緒だ。何か起きなければ警察は動かない。そして、アンタに俺の正体を喋ったところで、俺の仕事を邪魔は出来ない。ここで何も見なかった、知らなかったことにすればアンタは今の日常を生きていける」

「そ、そんなことできるか！ あんた、さっき生徒を殺すって言うただろ！ そんなこと言われて、ほっとけるか！」

「じゃあ、どうする？ ろくに拳銃の扱い方も知らないド素人に、何が出来る？」

「……それは……」

「ああ、邪魔をするってのも有りか」
「は？」

言い淀んだ俺に、東藤は何か思いついたように言葉を吐いた。その台詞に、不吉な予感がしてくる。

「事が簡単に進むのは退屈なんだ。それに、相手はガキ一人。森本先生、アンタ、俺を邪魔してみろよ」

「はあああ！？」

さらっと言われた台詞に、驚くなという方が無理だ。何せ、さっきまで俺には邪魔など出来ない、などといった奴が、あっさりと掌返したように自分を邪魔しろ、と言う。邪魔をしてやるつもりはあったが、それでも一般人の俺が出来ることなどあるはずもない。それなのに、東藤はさらっと言ってのけたのだ。

「邪魔って……」

「その持つてる拳銃を貸してやるよ。ちょうど手にも合ってるみたいだしな。なに、ルールは簡単。俺は生徒を狙う、アンタは俺を止める——……それだけだ」

「だから！ 拳銃貸されても、扱い方なんて分かるはずもないだろ！」

「ま、それはそうだな。じゃあ、まず引き金を引いてみる」

「は？」

「ほら、そのだよ」

反論している最中に言われ、俺は引き金と言われた部分を探す。東藤にその部分を教えられ、引き金を引くとカチャツと音がした。

「いいか、打つときは必ずそこを引け。それから腕を伸ばし、的を正確に見る。一瞬足りとも目を離さず、ここを押せば発砲出来る。やってみろ」

「え、ちょっと……」

「打て！」

「うわっ！」

声に驚き、俺は現状を理解できずに銃を打ってしまった。アニメや映画であるような発砲音が響き、弾が壁を貫く。

「……ふん、筋は良さそうだな。ま、あとはゲーム中に感覚を掴むだろ」

「な……な……」

初めて拳銃を撃った感触が、未だに両手を震わせる。そのためか、上手く声が出なかった。

「ピストルなんだから、そこまで驚くことじゃないだろ。衝撃だつてそれほど強くない。普段持つてれば、手に馴染んでくるから少しでもいい。一日欠かさず持つてろ。あと、ちゃんとここにも持つて来いよ。俺は、いつでもガキを狙ってんだからさ」

そう言って冷徹な笑みを見せた東藤はカツカツと歩いていった。暫く放心していた俺だったが、ハッと我に返ったあと、俺は逃げるように学校を去った。

こうして、人生最悪のゲームが始まってしまった。

The first game

夜の学校はその闇とともに一瞬にして危険な場所へと化す。どこぞのアニメや漫画で言う妖怪がうようよ………なんて甘いことではない。

まさに戦場。

なぜそんなことが言えるのかというと、今まさにその真っ最中だからだ。

「あんにゃろー……少しは慣れてきたつつつてもこっちは素人なんだぞ……」

カチャツと拳銃の引き金を引きながら、俺はぶちくさと文句を言う。

これほど呑気なことを言っではいられない状況なわけだが、最近慣れてきている自分に驚いている。もともと運動神経も良い方だし、意外と順応能力も高い、と自負はしているが、さすがに自分自身に引いてしまう。

「随分と余裕が出てきたじゃないか、森本先生」

クスツと笑った声まで、静かな校内に響く。近くにいる、などと錯覚してはいけない。反響がいいぶん、相手が近くにいるとは限らないのだから。

けれど、無理矢理こんな夢物語のような、嘘のような現実に嘆くな、というほうが無茶な話だろう。だから、この相手には本気で怒りをぶつけることが出来るわけなのだが。

「何が余裕だ！ おま、俺が素人ってこと忘れてないか!？」

「ほう？ たった数字つで撃ち方も避け方も様になってきている奴が、まだ素人気分とはな」

「うっせーよ！ だいたい、テメーがこんな事を始めたのが原因だ

ろうが!」

「言ったら。簡単にガキ一人を殺すのはつまらねーって」

「子どもでも一人の命だぞ!　そう簡単な物のように言うな!」

「簡単だろう。世の中は生きるか死ぬか。単純に出来ているんだからな」

さも軽々しく言う東藤に、俺は何度怒りを覚えただろうか。

だが、どれほど言おうと、東藤は全く聞き入れてはくれない。

「お前の説教は聞き飽きてるんでね。そろそろ動こうぜ?　森本先生」

「……にやろ……」

パンツと耳元の横を銃声を通った。わざわざ外したことぐらいは分かる。おそらく口ではなく動け、ということだろう。

先ほど撃ってきた方角に俺も撃ってみるが、何一つ物音がしない。おそらく空振りだったんだろう。周囲が静かなせいで普段より音が良く通った。ピリピリとした緊張感が肌を刺していく。

チラリと近場にある時計に目をやった。時刻は深夜一時を回っている。奴が揭示してきたゲーム時間は深夜二時まで。それまで、あと一時間弱。

「素人甚振って楽しいの……かよっ!」

容赦のない東藤に、俺も少しばかり反撃を試みる。けれど、全く手応えがない。撃ち抜いたのは何もない空間。

それでも、諦める気はなかった。

俺が諦めればそこでゲームは終了。生徒の命を見捨ててしまうことになる。

「そんなこと……絶対させてたまるかっつーの!」

怒声とともに何発も撃ってやった。しかし、どれも手応えがあるとは思わなかったが、ちんたら撃っていてもきりが無い。

「……やるじゃねーか。ま、一発も当たってねーけどな」

「う、うっせー!」

こんな状況かで、そんなことを褒められても全く嬉しくない。そ

もそも、殺り合っているような場面で、相手を褒める東藤の気がしれなかった。

「おっと……楽しんでたら時間切れ（タイムアウト）か。今日はここまで、だな」

東藤の台詞を聞き、俺は自分の腕時計を見た。そこには二時の文字盤を通り過ぎている針が目に入った。

時間が決められていたことにホッと胸をなで下ろした。拳銃弾数を見ると、一つも残っていない。最後に乱れ撃ちしたことで弾を使い切ってしまったらしい。弾数をちゃんと数えろ、とか言われてしまいかもしれないが、こんな緊迫した空間で、そんな余裕なんてあるはずもない。

「……弾……」

「無駄弾撃ち過ぎなんだよ」

「知るか。お前がこんなゲームなんて止めてしまえば銃なんて不必要だろ」

「それじゃあ、俺が楽しめないだろ」

「んなこと知るかよ」

幾度となく説得を試みる俺だが、東藤には何一つ理解してもらえない。結局無駄話となってしまう。けれど、諦めるつもりは毛頭なかった。

足元に弾が入っている袋が転がってきた。一週間はこれで済ませろ、ということらしい。持ち上げるとその重さが腕に申し掛つてくる。

この一発で、人を簡単に殺せる。

こんな状況でなければ、拳銃の重さも、弾一つの重さも知ることにはなかっただろう。

「……お前、こういうのってどこで手に入れてくるんだ？」

話しかけ、返事を待った。しかし、東藤からの返事はない。

「東藤？」

もう一度声をかけてみるが、やはり返事はなかった。渡す物だけ

渡して、本人はとっとと帰って行っただろう。すでに何度もこう
いった置いてきぼりをくわされている俺としては、何も感じない。

「んなわけねーだろ！くそっ、絶対改心させてやる！」

拳銃を懷に忍ばせてるホルスターへとしまい、俺は職員室へと戻
った。自分のカバンをひったくるように持つと、全速力で家へと帰
宅した。

The second game

昨夜の二時過ぎに帰宅してから今日の準備と文部科学省に送らなくてはならない日誌を書き、一日の仕事を終えたのはすでに三時を回っていた。それから七時に起き、身支度をすませて学校へと車を飛ばし、寝不足顔で一日の仕事が始まる。

これが、人生最悪のゲームが始まってからの俺の日常だ。こんな生活をしながら、良く自分の体もっているものだと感じしてしまう反面、呆れてしまう。それでも、俺がゲームを続けている限り、今のところ生徒に危害を加えていないことがせめてもの救いだ。東藤が何を考えてこんなゲームだとか、暗殺者だとか言っているのかは分からない。だけど、一つだけ分かることがある。

その気になれば、俺やその標的となっている生徒をすぐさま殺せる、ということ。

何度も撃ち合ったんだ。それぐらいのことは肌で感じ取ることが出来た。

俺は本当に遊ばれているんだ。強者が弱者をいたぶるように、俺はまだ生かされている。

そう思うと、冷や汗が流れた。

「おはようございます、森本先生。顔色悪いですが、大丈夫ですか？」

「……」

世の中はもの凄く理不尽だ。

なぜ昨日まで打ち合っていたこの男は平然とした顔で俺の前に出てこれるんだ。

なぜこうも元気はつらつとした顔色なんだ。

「テメ、東藤……」

「機嫌悪いですね。まあ、教職の仕事甘くないって思っていましたけど、さすがに疲れますね、森本先生？」

ニツコリと爽やかな顔を向けられ、その眩しさに殺意を覚えた。
しかし、今は学校。しかも周囲には大勢の教師たちがいる。こんな
ヌケヌケと打ち合っている相手と接しているんだ。ここで
大声を出してこいつの正体を言ったところで、俺が白い目を向けら
れるに決まっている。

せめて決定的な物さえあれば警察に訴えられるというのに、こい
つの尻尾を掴んだのは俺だけ。あいつの拳銃には俺の指紋までつい
ている。下手に動けば俺の方が捕まり、ゲームは終了。こいつは生
徒を殺し、姿をくらますだろう。

「くそっ……ムカつく野郎だぜ……」

「教員にしては口が悪いですよ。それとも、今すぐに終わらせてや
ろうか？」

ボソツと小声で言われ、俺は背筋が凍った。奴の目は獰猛な肉食
動物のように、獲物を狩るハンターの目をしていた。

忘れてはいけない。

こいつは躊躇いもなく引き金を引き、人を殺せるんだ。

固まってしまった俺を、東藤は声をおさえて笑い出した。

「なっ……」

「そう怖がるなって。俺もせっかく用意出来た楽しみをそう簡単に
終わらせるつもりはねーよ」

「っ……」

目の前の男をどれほど殴ってやりたいと思っただろうか。けれど、
逸る衝動を必死に抑え込む。思うがままに行動し、問題を起こすわ
けにはいけない。

「さて、そろそろ教室に行きましょう。HRも始まりますよ」

自分が馬鹿にされているのは分かる。けれど、東藤の言葉に頷き、
俺たちは教員室から出ていった。東藤と顔を合わせまいと校舎を見
回していた俺はふと違和感に気づいた。

「そういえば……俺たちが撃った跡がない。どうして……」

疑問に思う俺の横でクスツと笑い声が聞こえた。その人物は想像

するまでもない。東藤へと目を向け、俺は疑問をぶつける。

「もしかして、お前が？」

「さあな？」

しかし、東藤は不敵な笑みを浮かべるだけで疑問には答えてくれなかった。立ち止まった俺を置いて先に進む東藤に、慌てて後を追うように足を早める。

「さあなってなんだよ？」

「さてな」

「……なんなんだよ、ったく……」

「答える必要があるのか？ そんな事を知っていようといまいと、ゲームに支障はない」

「あーあー、そうですね。その通りですよ、東藤……先生」

何を言っても、東藤は答えてはくれないだろう。自分の正体をあつさりと言ったくせに、だ。

相手にするのも疲れてきた俺は当てつけに盛大なため息をついたあと、自分が担当しているクラスの扉に手をかけた。

「おーい、ホームルーム始めっから席つけー！」

ざわめいていた教室が徐々に静まっていく。少しやんちゃ盛りではあるが、受け持ったクラスは基本的に素直な生徒が多い。進学クラスということもあるのだろう。目立つような問題点などは見つからない。不登校の生徒も、イジメも無縁と思えるほど、クラスの雰囲気は良かった。強いて言うならば、女子にモテモテな東藤という存在がいることぐらいだろう。

「東藤先生ー！」

「HRなんだから静かにしなさい」

「きゃあー！ 今日も格好良いー！」

「こら、うるさいぞ、そこ三人！」

「タカちゃんには言っていないでしょー！」

「タ、タカちゃんって……」

東藤と自分の扱いの違いに、さすがの俺も呆氣にとられてしまっ

た。担任は俺で、東藤は副担任だというのに。

「ちゃんと森本先生と呼びなさい」

「はい」

フォローを入れてくれるが、東藤の正体を知っている今、嬉しさの欠片も感じない。俺は恨めしそうに東藤を見る。しかし、そこにはどこか楽しそうな、涼しい笑顔を向けられた。

「HRを続けるぞー」

フィツと顔を背け、俺は中断されたホームルームを再開させた。

時計の針で時刻を確認し、チャイムが鳴る数分前にホームルームを終わらせた。

一限目は英語で、担当は東藤。本人曰く教師とは仮の姿らしいが、生徒からの評価は高い。ルックスの高さ云々より、単純に授業が面白くて分かりやすいのだ。その結果は定期テストで出ている。平均点を下回っていた大半の生徒がその点数を上げている。

他の教師たちからも評判が良い。まさに絵に描いたような万能な人間。だから、不思議に思うのだ。

なぜ、暗殺者などという仕事をしているのか。

「……」

「タカちゃん、漢字間違ってるよ！」

「へ、あ？」

授業中ということを忘れ、女子生徒に注意されてハツと我に返った。視覚に入ってきた黒板には『拳銃』の二文字。教科書と予習していたノートには『兼従』の二文字が書かれていた。担当している教科は古典。いくら同音といえど、普通なら間違えないだろう漢字だった。

「しっかりしてくれよ、モリセン」

「ちょ、お前らここぞとばかりに言うな！　ちゃんと『先生』と呼びなさい！」

「ええー」

生徒からのブーイングに、むしろ俺の方が言い返したくなる。

一緒に励まし合えると思っていた副担任は生徒を狙っている暗殺者で、あげくに俺は奴の遊び相手のようなことをさせられている。真夜中、誰もいなくなった校舎で二人だけで銃の撃ち合い。いったいこの漫画だよ、と思うが、自分からおりることはできない。生徒が狙われていると知った以上、見殺しになんて出来るはずがない。教師として、生徒を守る義務がある。

「ざわついてないで、授業続けるぞー！」

少しざわめいてきた生徒を落ち着かせ、俺は今度こそ授業に集中した。

授業が終了し、俺は教員室へと戻ろうと歩を進ませる。

「あの、森本先生！」

「ん？」

またもに“先生”と呼ばれ、俺は後ろを振り返った。そこにはクラス委員長の安藤がいた。

「安藤か。どうした？」

「実は分からないところがあって……」

「ん、どこだ？」

「ここなんですけど……」

教師として、生徒から頼られることは心から嬉しいことだ。疑問だった箇所が理解できて笑顔になる。その瞬間が、何よりたまらなく嬉しさを感じるときだった。

「ありがとうございます！」

「おう。また分からないことがあったら聞きにこい」

「はい！」

納得できたようで、安藤は笑顔で俺のもとから立ち去っていった。その姿を見て、さきほどの笑顔を見て、俺は教師になって良かったと思う。たとえ今、変なことに巻き込まれていようが、教師になったことへの後悔はない。もし今のようなことになってしまうと分かっている、俺は何度でも教師を目指しただろう。

ならば、東藤はどうなのだろうか。潜入とはいえ、教師という職

を演じている今、あいつは何一つ感じていないのだろうか。生徒からも、教師仲間たちからも信頼の厚い東藤。普通なら何年、いや一生かかっても築くことができるかどうか分からない信頼関係を、あつという間に築いているというのに。

「……あいつ、本当に教師だったら良かったのに……」

俺からすれば、羨ましいほどの才能を持っているというのに、東藤の本職は暗殺者。どこか現実離れしすぎているが、現実で撃ち合っているのだ。こうして一日を過ごしているはずのこの学校で。

いったい、どれほど夢であってほしいと思ったことか。けれど、何度目を覚ましても存在している一丁の拳銃。持てばズシリと重く、予備の弾も東藤からもらっているのだ。どう足掻いたところで、引っくり返ることのない事実。これは、現実だ。

重たいため息を盛大に吐きながら、俺は自分の机のもとに向かった。隣には東藤の席。しかし、今はその席は空白だった。おそらく他のクラスの授業なのだろう。

俺は潰れそうになる体に鞭を打ち、本日の仕事を早めに仕上げようと取り掛かった。

そういつも、東藤ばかりに涼しい顔をさせてたまるか。

東藤への対抗心からというべきか、努力の結果というべきか。

どちらにしても、なんと皮肉なことだろうか。いつもなら夜遅くまでかかっていた教師としての仕事。それらが終わったのはなんと午後十一時頃だった。

「……ゲームまであと一時間、か」

時計に刻まれた時刻を見て、俺は呆然としていた。いつもならゲーム開始ギリギリまで仕事が終わらず、家に帰ってから後始末に追われ、睡眠時間はいつも二、三時間が普通となってしまった。朝食を食べる時間もなく、栄養ドリンクでなんとか体をもたせてきた。それでも体調を崩さず、今日この時まで元気だった自分に驚くしかない。

「まあ、その一方で呆れるけどな……」

自分の感想を自ら突っ込む。誰もいない教室が、己の心に広がる虚しさをより一層かき立てる。しかし、それ以上何かを喋ることもせず、俺は沈黙の中で一人、ゲームの始まりを待っていた。

そして、十二時を指した時計が成り始める。それが、ゲームの始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1714s/>

Gunner Game

2011年10月28日03時14分発行